

War songs in the novels during the Second World War

– A study of The Novels of the 8th of December

LIAO Hsiuchuan

At 7:00 on the 8th of December 1941, the citizens of Japan had received news from the radio that the Pacific War has started when Japan has entered the combat state against the Allies. In accordance with the emergency, literary magazines has changed some of the original manuscript in urgency and published a special war edition for the January publication in 1942. The February edition has detailed articles of publication writers' view on the war and attitudes needed to face the incident.

This paper will focus on the novels based on the Pacific War on the 8th of December. There were a total of five novels which were called *The Novels of the 8th of December*, according to an investigation by Odagiri Susumu. The Second Sino-Japanese War erupted on the 7th of July, 1937 has introduced the National Spiritual Mobilization Movement and National Service Draft Ordinance by the Japanese Government to ensure the success of the war. Aside from the requisition of citizen, songs were also included as the prevalence and popularity of war songs were viewed as tools to propagate national policies, which is also an important strategy of inculcating patriotism to citizens. Most of the works in *The Novels of the 8th of December* described the singing of war songs. Thus, the research will emphasize on the radio announcements and war songs written in the novels.

戦時下の小説にみる〈歌〉の役割

——<12月8日小説群>を中心に——¹

リョウ シュウケン
廖 秀娟

一. はじめに

1937年7月7日日中戦争の勃発で日本は全面的に戦争に突入した。戦争を完遂するため、「国民精神総動員運動」が推進され、のちに「国民徴用令」が施行された。あらゆる分野の人材が総動員される中で、最も注目されたのは、歌の徴用であった。

1937年8月24日閣議決定された総動員運動の実施要綱で、「[「挙国一致」「尽忠報国」ノ精神ヲ鞏ウシ事態ガ如何ニ展開シ如何ニ長期ニ亘ルモ「堅忍持久」総ユル困難ヲ打開シテ所期ノ目的ヲ貫徹スベキ国民ノ決意ヲ固メ之ガ為必要ナル国民ノ実践ノ徹底ヲ期スルモノトス]という運動の目標が定められた。その実施方法の（七）と（八）には、それぞれ「ラヂオノ利用ヲ図ルコト」、「文芸、音楽、演芸、映画等関係者ノ協力ヲ求ムルコト」と書かれており、音楽がラジオとともに、国に動員されることとなった。そして、音楽とラジオが最も多く活躍したのは、1941年12月8日午前7時に大本営がラジオを通して「開戦」を告げたその日であった。

1941年（昭和16年）12月8日東京時間午前3時19分、第一波183機の艦上機群は真珠湾に迫り、米海軍の最大根拠地真珠湾に空襲を仕掛け、日本は太平洋戦争へと突入していった。しかし、日本国民にとって、太平洋戦争は1941年12月8日午前7時、ラジオの臨時ニュースが告げる「大本営陸海軍発表、十二月八日午前六時、帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘

状態に入れり」によって初めて始まるのである。

迅速に戦況を報告するため、予定のラジオ番組が急遽変更され、定時ニュースのほかに、13回の臨時ニュースが放送された。そして、ニュースの合間には「愛国行進曲」「軍艦マーチ」「敵は幾万」「太平洋行進曲」などの軍歌が流された。佐藤和男氏が「戦時音楽放送」で、十二月八日のラジオ放送で流された軍歌に触れ、戦時下におけるラジオと軍歌の役割を述べた。「戦況ニュースの前後に於ける或ひは各種の放送演説に続いて国民的士気を彌が上にも昂揚させたのは何か。それは「軍艦マーチ」であり、「敵は幾万ありとても」であり、「敷島行進曲」「愛国行進曲」などであった。斯くの如く戦時下に於けるラジオ機能は今や完全に国家機関の軸芯と成り、音楽がまた弾丸の如く軍需的必要を強調したのである」（『ラジオ時評』『音楽之友』1942年1月号、106-107頁）。

そして、日本放送協会は開戦に備え、「戦時放送業務処理要綱」に沿って、放送の戦時体制を取り、以下の4点のように変更を行った²。

- ① 電波管制により都市放送を中止して全国放送番組一本にした。
- ② ニュースを優先的に組み入れ戦況、国交、国策などを午前六時から午後十一時まで毎時の初めに流した。
- ③ 国民の士気を鼓舞するために音楽を空き時間に組み入れ勇壮な行進曲や軍歌歌謡を放送した。
- ④ 夜間八時から一〇時までの時間の中へ特に壮大な音楽や明朗な演芸を組み、国民の戦争推進精神力を涵養する時間とした。

要するに、戦時色が濃くなるにつれて国民の戦意高揚を煽り、戦争協力への意欲を駆り立てるために、ラジオの持つ統合性、軍歌の持つ伝達性、流行性が重んじられ、それらが国策を推し進めるのに重要な手段として考えられたのである。この主旨の下、戦時下に戦意高揚、愛国精神の鼓舞を目的として愛国歌が多く製作され、国民に唱歌されていた。

ところが、その歴史的な一日を近代の作家たちは、どのように書きとめたのであろうか。作家の開戦日に抱いた思いを明らかにするには、当時の文芸雑誌を検討するのが有効であろう。当時の雑誌や新聞に載せてあった12月8日について言及した評論、小説、短歌、俳句、特集の所蔵を小田切進氏が緻密に調査³を行い、発言の抄録をし、文学者が開戦日を如何に受け止めたかを明らかにした。

本稿が特に目を配り注目したいのは、太平洋戦争開戦日を題材にして書かれた小説である。小田切進氏の調査によれば、その中で一早く雑誌に掲載された小説は火野葦平「朝」（『新潮』第39巻第1号）であるという。それに加えて、2月号に発表された上林暁「歴史の日」（『新潮』第39巻第2号）、伊藤整の「十二月八日の記録」（『新潮』第39巻第2号）、太宰治「十二月八日」（『婦人公論』第27巻2号）のほか、1942年6月に掲載の坂口安吾「真珠」（『文芸』第10巻第6号）があり、それらの小説が〈12月8日小説群⁴〉と称されている。

戦時下の作家たちが1941年12月8日という日づけを表現する時に、ラジオと軍歌はどのような役割を果たしたのであろうか。ラジオ放送を通して軍歌が日本全国の津々浦々まで放送されたことで、戦時下の人々の耳に届き、国民の心にまで浸透していった。そして、それらの歌の断片が、当代の文学者や小説家によって作品の中に書き残されたのである。それらの軍歌の断片、歌詞に孕まされる思いを明白にするのが、本研究の狙いである。軍歌はラジオ放送を通して、忠義／天皇のために死ぬことを最高の名誉とする国家の欲望を日本国民に吹き込むことで戦争に加担したともいえる。しかし、戦時下の作家たちが敢えてそのような戦争謳歌の強い記号を作品に取り込むことには大きな意味があると考えられる。逆に言えば、軍部の思いと常に肩を並べて歩む軍歌だからこそ、戦時下の文学を考える際の有効な手掛かりだといえよう。

二. 軍歌を<日常>に送り込むラジオ放送

周知のとおり、戦時下のラジオ放送は、国民に対し、単に国家の情報宣伝に務めるのみならず、戦争遂行上の手段としてのプロパガンダ、シンボル操作、ディスインフォメーションなどの執行も随時に付随していたといえる⁵。そして、太平洋戦争開戦日という運命の日をテーマにした小説である以上、戦争突入や開戦の詔勅などを通告するラジオの臨時放送が必須不可欠の存在であり、しきりに流されていた軍歌の描写も欠かせないものであろう。

12月8日当日のラジオ放送について詳しい調査をおこなった櫻本富雄氏のほか、竹山昭子氏も戦時下のラジオ放送と戦争の関わり方に膨大な研究を蓄積してきた⁶。以下の表は諸氏が調査した当日の放送時刻及び放送内容を作品と照らしながら、各作品に描かれたラジオ放送と軍歌の場면을リストアップしてみたものである。

作品名	作品内の時間	作品内のラジオ放送内容	軍歌についての描写
火野葦平 「朝」	「西空はまだ まつ暗」な頃 から、朝の出 社まで	<ul style="list-style-type: none"> ・「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入れり。——このやうに、ただいま、大本営陸海軍部より発表されました。……もう一度くりかへして申しあげます。帝国陸海軍は……」151頁 ・ラジオはつぎつぎに戦争のニュースを知らせてゐた。154頁 	<ul style="list-style-type: none"> □ ラジオは「敵は幾万ありとても」といふ「元寇の歌」を勢ひよく奏しはじめた。151頁
上林暁「歴 史の日」	7時 の 臨 時 ニュースから、夜中過ぎ に原稿を書き 上げる頃まで	<ul style="list-style-type: none"> ・「大本営陸海軍部発表十二月八日午前六時、帝国陸海軍は本八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」396頁 ・「情報局発表、八日午前十一時四十五分、只今アメリカ、英国に対する宣戦の大詔が発せられ、また同時に臨時議会召集の詔書が公布されました。」399頁 ・大本営海軍部発表、八日午後一時。(略) 400頁 ・大本営海軍発表、八日午後八時四十五分。(略) 405頁 	<ul style="list-style-type: none"> □ 軍艦マアチの奏樂が湧き起つてゐる。397頁

作品名	作品内の時間	作品内のラジオ放送内容	軍歌についての描写
伊藤整の「十二月八日の記録」	昼、対米英の宣戦布告の頃。(午前11時45分頃)	「対米英宣戦布告とハワイ空襲のラジオニュース」 「対米英宣戦布告の御詔勅」	<ul style="list-style-type: none"> □ 軍歌の放送されるのを背後に聞きながら、私はこの記念すべき日の帝都を見ておかねばならぬ、とやっと自分の心ひかれる方向を見定めた。55頁 □ 私は地下室に下りた。そこではラジオが軍歌を奏してをり、澤山の男たちが新聞をひろげてゐた。私の眼は新聞の大きな活字の上をあちこちと走り、改めて興奮が湧きあがつた。59頁
太宰治「十二月八日」	7時の臨時ニュースから、夜燈火管制まで	<ul style="list-style-type: none"> ・「大本営陸海軍部発表。帝国陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」194頁 ・マレー半島に奇襲上陸、香港攻撃、戦線の大詔。197頁 ・重大なニュースが続々と発表せられている。比島、グアム空襲。ハワイ大爆撃。米艦隊全滅す。帝国政府声明。198頁 	<ul style="list-style-type: none"> □ ラジオはけさから軍歌の連続だ。一生懸命だ。つぎからつぎと、いろんな軍歌を放送して、とうとう種切れになったか、敵は幾万ありとても、などという古い古い軍歌まで飛び出してくる始末なので、ひとりで噴き出した。放送局の無邪気さに好感を持った。196頁 □ 背後から、我が大君に召されえたあるう、と実に調子のはずれた歌をうたいながら、乱暴な足どりで歩いて来る男子がある。200頁
坂口安吾「真珠」	12月6日の午後から12月8日「夜が落ち切った頃」	・大詔捧読、つづいて、東条首相の謹話があった。207頁	<ul style="list-style-type: none"> □ 無し □ 鼻歌のみ

(図1、筆者作成)

十二月の八日午前11時45分、情報局発表の日本対米英宣戦の大詔がラジオを通して布告された。この事態に応じ、文芸雑誌は急遽原稿の一部を変更し、1942年1月刊行の新年号で様々な作品の開戦特集を送り出した⁷。たとえば『文芸』1942年新年号では斎藤茂吉「開戦」、高村光太郎「彼等を撃つ」、草野心平「われら断じて戦ふ」三氏の短歌に続いて「戦ひの意志」（文化人宣言）が載せられ23名の文学者が開戦をめぐる思いを寄せている⁸。そして『新潮』（第39巻第1号）の新年号では中村武羅夫「日・米開戦と文学者の覚悟」が雑誌の巻頭に飾られたほか、創作欄では火野葦平の開戦早朝の模様を描いた小説「朝」が掲載され、〈12月8日小説群〉の中で、最も早く発表されたのである。

これは戦時下、節約を以て「国に協力する覚悟」が求められる中、新聞記者で、帰還兵であった研吉が、父の町内会長でありながら、200圓もの大金を費やして買った「なみの木」を玄関の脇に植えるために、牛二頭を使って運び、何度もバスをとめ、電話線を動かし、道幅いっぱいに立ちふさがって交通を妨害したという利己的な行為に対して、反発と苛立ちを覚える様子が主に描かれていたのだが、やがて、そんな研吉も早朝の開戦を告げるラジオ放送を耳にし、その歴史的事件に感動したことにより、父への苛立ちが落ち着き、反感を買っていた「なみの木」が意外にもこのあたりの風景をすっかり変えたと、思いなおして心が軽くなったという小説である。

ところが、同時代の文学評論家岩上順一氏は、主人公研吉が「容易に簡単に妥協した」ことは、「単に書き方や方法の安易さがあるばかりでなく、また作家としての精進不足があり、文学を軽く見てゐる安易な精神が存在する」と指摘し、十二月八日太平洋戦争開戦日における国民的感動を、「個人的、私的経験」に引き下げたとして、火野葦平の小説の「浅薄さ」を批判した⁹。

図1に示すように、火野葦平「朝」の作中時間は、「西空はまだまつ暗だ」から主人公研吉が朝食を済ませて会社に出社するまでの時間なので、ラジオ放送をめぐる描写は早朝7時の臨時ニュースとその後の戦果報告しかない。そして、軍歌についての言及は「ラジオは「敵は幾万ありとて」という「元寇の

歌」を勢ひよく奏しはじめた」この一箇所のみで、作中のラジオ放送及び軍歌についての言及は、恐らく歴史的な日の時間説明としてのみ機能していると考えられる。上記小田切氏の論によれば、太平洋戦争の開戦日に合わせて、急遽原稿を入れ替えたことでよく機能できなかったのではないかということである。

次の上林暁「歴史の日」は、諸小説の中で開戦日当日のラジオ放送内容が最も詳しく引用されており、ラジオ放送の時間が遅くまで叙述された作品である。作品は冒頭の「昭和十六年十二月八日は、遂に歴史の日となつてしまつた」から始まる。早朝寢床のなかで新聞を読んでいる「私」（武智さんと友人に呼ばれている）が隣の臨時ラジオニュースの放送を聴いてアメリカ・イギリスと戦争が始まったと知らされる。やがて午後8時45分の大本営海軍部発表で、戦果報告を以て作品世界が閉じられた。ところが、ラジオニュースの放送が作中で詳しく記述されているのに対して、軍歌についての描写が「軍艦マアチの奏楽が湧き起つてゐる」にとどまっていて、軍歌の描写に深い意味を付与していないといえよう。

そして、上記の2作に比べて、伊藤整の「十二月八日の記録」と太宰治「十二月八日」には、軍歌への言及がより多いことがわかる。しかしながら、同じ1941年12月8日を取り扱った作品である坂口安吾の「真珠」には、ラジオニュースが少ないどころか軍歌についての言及が一つもないのである。以下は、伊藤整の「十二月八日の記録」、太宰治「十二月八日」、坂口安吾の「真珠」を中心に、それぞれの作品に軍歌の有無の意味について検討していく。

三. 背中を押される「私」と列から逸れる「主人」

伊藤整の「十二月八日の記録」は、十二月八日の東京の街景色と視点人物「私」の心象を描いた作品である。郵便局への道すがら、開戦を知った「私」は、「家に帰らうか」と何度も思い巡らした。「私は家に帰らうかとも思つた。家のラジオは壊れてゐるから、病妻や風邪で学校を休んだ子供たちは、まだ何

も知らずにゐるだらう。私は躊躇った」(54頁)、「家族のところへは戻るまいと私は腹をきめた。(略)歩きながら、私は何故家へ帰らないのだらう、と反省した」(55頁)、「私はまたいやこれでいいのだよ、と自分に言ひ得るものも心の中に感じてゐる」(55頁)、「そして、それまで自分が、今日にも空襲があるなどとは考へてゐなかつたことに気がついた。そこで私は、再び家に一度戻らうかと思つた。だが前と同じ順序で私は帰らないことに腹をきめ、歩いて行つた。」(56-57頁)

上記の引用からわかるように、対米英の宣戦布告とハワイ空襲のラジオニュースを聞いて、「私」は「身体の奥底から一挙に自分が新しいものになつたやうな感動を受けた」一方、開戦による召集が来ると、銃後に残される病妻と幼い子供たちのことが心配になるのである。

ところが、「軍歌の放送されるのを背後に聞きながら、私はこの記念すべき日の帝都を見ておかねばならぬ、と、やっと、自分の心ひかれる方向を見定めた」とあるように、視点人物「私」は、軍歌に背中を押されるように、「この記念すべき日の帝都」をみることにした。彼が向かった先は、宮城であつた。宮城の前に、カーキ色の服を着た中学生らしい一団が引率されて縦隊をなして進んで来たところをみかけた。

みんな一人一人が若々しく、きつとした顔をし、身体をまつすぐにしてゐるのが、圧倒的に私の心に応えた。一致した集団の精神の純潔さは、その人数だけに拡大された感動の量でもつて私にのしかかり、私は涙ぐむのであつた。この一人一人の中学生が日本の臣民であるやうに、私もまた単純な一個の臣民であります、私はさう自分に言ふやうに中学生たちの横隊になつた列のあとから宮城を拝した。(「十二月八日の記録」58-59頁)

要するに、本来病妻幼子のことが心配で何度も引きかえそうと思い悩んでいた「私」だが、軍歌の曲が彼の背中を押し、宮城へと向かわせ、やがて「一致

した集団の精神の純潔さ」に感動させられ、天皇に忠誠を誓う集団の列／国家の列に加わる事となったのである。伊藤整「十二月八日の記録」において、作中の軍歌はまさしく帝国が歌に寄与した役目を如実に果たしていたといえよう。

そして、同じく開戦日をテーマにする太宰治「十二月八日」は1942年（昭和17年）2月1日発行の『婦人公論』（第27巻2号）の創作欄に発表されたものである。この作品は、題名が示すように、太平洋戦争が開戦した1941年12月8日の出来事を、東京に住むある主婦が日記として書きつづるといった手法で記されたものである。作品の冒頭において、日記の書き手である「私」が、今日の日記が百年後「歴史の参考」になるであろうと仮定し、「昭和十六年の十二月八日には日本のまずい家庭の主婦は、どんな一日を送ったか、ちょっと書いて置きましょう」と記してみたのである。

そして、この「私」が記した12月8日その「一日」は、朝、布団の中で娘の園子に乳を飲ませることから始まる。おむつの洗濯や朝食の支度をし、「主人」が雑誌社に原稿を届けに出かけていたため、一人で簡単な昼食を取り、それから園子をおんぶして市場へ買い物に行く。途中で亀井さんのお宅へ立ち寄り、帰宅後夕食の支度に取りかかると、隣の奥さんが清酒の配給券の相談にやって来た。そして、夕食を終え、子供を連れて銭湯へ行く。その帰り道は灯火管制で暗かったが、偶然に「我が大君に召されえたあるう、と実に調子のはずれた歌をうたいながら、乱暴な足どりで歩いて来る」「主人」と出くわすという場面をもって日記が終わる。

太宰治「十二月八日」の先行論で灯火管制の夜、軍歌を歌いながら帰途につく「私」の主人について、鈴木敏子氏は次のように述べた。「まっくらな夜道を帰ってくる夫は軍歌を調子はずれに歌っている。しかも歌詞は畏多くも「わが大君に召されたあるうー」である。それは「いのち栄えある朝ぼらけ」と続くものだ。これを調子っぱずれに歌ってしまっは大君の尊厳が損なわれるし、栄えあるいのちも色褪せてしまう。不敬罪相当のものであったはずだ。¹⁰」と指摘した。

しかし、ここで注目したいのは、なぜ、主人の歌った曲は「出征兵士を送る歌」なのかということである。「全国放送番組 昭和16年12月8日¹¹⁾」を参照してみると、当日ラジオで放送された曲の時間順は、次の通りである。

行進曲「皇軍の精華」「空軍の威力」「大艦隊の行進」「暁の進軍」(07:50)、愛国行進曲 (12:00)、行進曲「皇軍の意気」、大行進曲「アジアの力」、愛国行進曲 (12:17)、「敵性撃滅」(合唱、17:14)、管絃楽「軍艦行進曲」、合唱「海ゆかば」「敵性撃滅」「遂げよ聖戦」「護れわが空」「太平洋行進曲」「国に誓ふ」「アジアの力」「愛国行進曲」、管絃楽「分列行進曲」(18:30)、吹奏楽行進曲「聯合艦隊」「軍艦」(20:15)、ニュース歌謡「宣戦布告」(20:24)、吹奏楽「海行かば」(20:40)、吹奏楽「世紀の進軍」「海洋航空の歌」「海の進軍」「護れ海原」、合唱「太平洋行進曲」「愛国行進曲」(21:00)。

それを確認してみると、当日のラジオ放送では一度も「出征兵士を送る歌」を流さなかった。したがって、外のラジオの放送で偶然に聞いて気まぐれで口ずさんだという可能性がなくなった。逆に、一日中数多くの軍歌が繰り返して流される中、主人がそれらの歌ではなく、あえて「出征兵士を送る歌」を歌ったことには重要な意味があると考えられる。

「出征兵士を送る歌」が作り出された背景には、次のような事情がある。「この時期は日中戦争の最中だったが、出征兵士を見送るいい歌が日本になかった。戦争が始まったころは、日露戦争期に作られた「日本陸軍」で兵士を見送っていた。しかしあまりに古い歌なのではないかと言われた。次に新作の「露営の歌」が使われた。これは曲調が悲しすぎると批判された。そこにのびやかに明るく、勇ましい「出征兵士を送る歌」が登場した。国民は喜んでこの歌を出征兵士に歌いかけたのである¹²⁾」。

この歌は、銃後の人が出征兵士を送り出す時に歌う歌である。それを裏返してみると、この歌を歌う主人は、銃後に取り残され、国のために戦うことので

きない身であることも知らされる。更に、軍隊の行進の歩調を合わすという軍歌が持つ本来の意味から考えると、国が戦争に突進する歴史の日に乱暴な足取りでしか歩けない主人は所詮帝国の列の足並みに同調することのできない人間なのであろう。

四. ラジオが止まったこと一坂口安吾「真珠」

坂口安吾「真珠」は1942年（昭和17年）6月1日に雑誌『文芸』の小説欄に発表された小説である。1941年（昭和16年）12月8日未明、日本軍による真珠湾攻撃で海軍の特殊潜航艇に乗り込み戦死した九人の「特別攻撃隊」の決死行為を題材としたため、「真珠」は<12月8日小説群>の一つとされる。

「十二月八日以来の三カ月あいだ、日本で最も話題となり、人々の知りがっていたことの一つは、あなた方のことであった」と、「真珠」の冒頭で語られているように、当初、真珠湾攻撃を成功へと導いた「特別攻撃隊」に関する情報は一切公表されていなかった。しかし、その翌年（1942年）3月6日大本営海軍部の発表によりラジオ放送や新聞に攻撃隊の存在及び事情の経緯が掲載され、世に知られるようになった。そしてそれをきっかけとし、坂口安吾が「真珠」に取り掛かったと言われている¹³。

作中では最初超人的で、且つ常人ではない「あなた方」（戦死した九人のこと）が真珠湾攻撃へと赴くため猛訓練に励んだ12月8日までの様子が描かれている。一方、それと対置させるかのように、語り手の「僕」は、12月6日から8日までの自分のぐうたらな小説家生活について語り始めている。「僕」は12月6日に小田原にいる知人のところへ、預かってもらっていたドテラを取りに行く予定であったが、その日は酔っ払って行けなくなってしまう。12月7日やっと小田原に到着したが、また知人宅で酩酊する。翌日8日大東亜戦争勃発を知った「僕」は、酒屋の親爺からの特配の焼酎を飲み、またもや泥酔してしまうことになる。そこで、12月8日に自ら死に赴く「あなた方」と酒に浸る「僕」とが対照的に描かれるのである。

坂口安吾の「真珠」において、ラジオ放送の場面が登場したのは、午後零時頃である。主人公「僕」は前日の12月7日友人ガランドウ宅で酩酊してしまい、翌日目を覚ますとガランドウの奥さんから「なんだか、戦争が始まったなんて言ってるけど、うちのラジオは昼は止まってしまうから」と言われた。奥さんの報告が「淡々たるもの」なので、「僕」はその戦争が「タイ国の国境の小競り合い」と思い込み、情報が途絶えたまま3時間余り本を読み、小田原の町に出て行ったのである。はじめてラジオ情報を得たのは、午後零時商店街の床屋で頬ひげをあたっているところで、次にラジオニュースが出た場面はガランドウの店先に戻ったところであった。しかし、その後、肝心の魚を取るために二人が二の宮に出てからは、ラジオニュースに関する描写がない。

僕はラジオのある床屋を探した。やがて、ニュースが有る筈である。客は僕ひとり。頬ひげをあたっていると、大詔の捧読、つづいて、東条首相の謹話があった。涙が流れた。言葉のいらぬ時が来た。必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ。一兵たりとも、敵をわが国土に入れてはならぬ。
（「真珠」207頁）

「真珠」では「僕」の12月6日から12月8日までの行動が語られたが、作中時間はほかの〈12月8日小説群〉の「一日」よりも長くなっている。しかし、「昼間多くのラジオが止まってしまう」という小田原の特殊事情により、ラジオが作中の〈日常〉に介入する場面が少ない。ラジオが止まったことで、帝国がラジオに付与した政治性、宣伝性、そして、常にラジオを通して流される軍歌も同時に作品の世界の外へと排除されることになる。

12月8日に布告された対米英の宣戦大詔が引き金となり、新聞、雑誌などのメディアにおいて、戦争を褒め讃える詩歌や俳句を著しく増加させることで、詩歌の吟唱を通して国民を積極的に戦争に参加させようという帝国の企図が伺える。更に1942年3月6日ラジオ放送で特攻行為に敢行した九人のことが

初めて公表されて以来、大本営に操られた当時の情報メディアのみならず、その新聞記事に踊らされた文学者、詩人、俳人、新聞記者さえも九軍神の〈神作り〉に熱狂的な献身ぶりをみせた¹⁴。

しかしながら、坂口安吾「真珠」の「僕」は、敢えて九軍神の神格性を脱ぎ、彼らを「あなた方」と呼び、軍歌ではなく鼻唄を歌わせて、当時過熱な戦争謳歌な新聞報道と対峙する一面が伺える。そこからわざとラジオや軍歌を取り入れないところから作品の「批判性」が浮き彫りにされたといえよう。

五. おわりに

本稿は、太平洋戦争勃発の日を主題にした小説群に描かれる軍歌の場面に着目し、小説の中で、開戦日の軍歌がどのような役割を果たしたのかを探ってみた。〈12月8日小説群〉の中で描かれた開戦日の軍歌には、国民の背中を押し、国の意のように促す一面が見られると同時に、国と同じ足並みで歩けない人を排除するという一面もうかがえる。一方、ラジオが止まった状況が活用されて、同じく12月8日を描くとしても、新聞や軍部の意図がラジオの故障で徹底的に排除され、国の意図に沿った九軍神、軍歌、神といった描き方ではなく、あなた方、鼻唄、超人を以て、軍部に踊らされた過熱な〈神作り〉と抵抗するのである。

以上、〈12月8日小説群〉を中心に作品中に描かれた開戦日の軍歌をめぐる描写を分析することによって、軍歌は決して単なる時代背景の表現にとどまらず、作品世界の解釈においても能動的に機能していることが明らかになったといえよう。

テキスト

伊藤 整「十二月八日の記録」『新潮』第39巻第2号、1942.2、54-59頁。

上林 暁「歴史の日」『増補決定版上林暁全集』第3巻、筑摩書房、2000.8、396-406頁。

坂口安吾「真珠」『昭和戦争文学全集4 太平洋開戦—12月8日—』集英社、1964.8、201-212頁。

太宰 治「十二月八日」『昭和戦争文学全集4 太平洋開戦—12月8日—』集英社、1964.8、192-200頁。

火野葦平「朝」『新潮』第39巻第1号、1942.1、145-155頁。

【注】

- 1 本稿は、2017年台湾科技部研究計画による研究成果の一部である。【『眾聲齊唱歌聲嘹亮の大後方－論昭和十年代文學中〈軍歌〉の表象－】計画番号：MOST 106-2410-H-155-003)。
- 2 櫻本富雄『戦争はラジオにのって 1941年12月8日の思想』マルジュ社、1985.12、30-32頁。
- 3 小田切進「十二月八日の記録」『文学』29号、1961.12、128-150頁。小田切進「続・十二月八日の記録」『文学』30号、1962.4、93-112頁。
- 4 細野律氏の調査によれば、初めて12月8日開戦日を扱った作品を命名したのは、評論家の宮内寒弥（『現代文学』1942年7月号）である。「宮内寒弥は、「大東亜戦争」勃発の〈十二月八日〉に関するいくつかの小説を「『十二月八日』小説」と呼び、上林暁「歴史の日」、伊藤整「十二月八日」、太宰治「十二月八日」などがその具体例としてあげている」（『坂口安吾「真珠」論—所謂「十二月八日」小説—との関連から—』『近代文学研究』12号、1995.3、17-18頁）。ここでは、表示上の混乱を避けるため、宮内寒弥が命名した「『十二月八日』小説」という呼び方を援用せずに〈12月8日小説群〉と呼ぶことにしたことを断っておく。
- 5 竹山昭子『戦争と放送』社会思想社、1994.3、20頁。
- 6 櫻本富雄『戦争はラジオにのって』（マルジュ社、1985.12）や竹山昭子『戦争と放送』（社会思想社、1994.3）、竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』（世界思想社、2005.7）などの著書のほかに、橋川文三編の『果てしなき戦線 日本の百年8』（筑摩書房、2008.5）では、「十二月八日の記録」一章があって、12月8日当日のラジオ放送内容及び放送時刻をまとめたものがあったので、それも参照の資料に入れる。
- 7 「十二月八日直後に原稿をめぐることになっていたらしい「新潮」「文芸」「文学界」新年号（昭和十七年）は、開戦と同時に急いで一部の原稿の入れかえをおこなった迹が明らかだ」と小田切進氏が指摘した。（『十二月八日の記録』『文学』29号、1961.12、130頁）。
- 8 小田切進「十二月八日の記録」『文学』29号、1961.12、131頁。なお、「戦ひの意志」を執筆した23名の文学者はそれぞれ次のようである。斎藤瀏、本多顕彰、亀井勝一郎、張赫宙、浅野晃、保田与重郎、上田広、富沢有為男、石川達三、清水幾太郎、津村秀夫、火野葦平、中野与一、崔承喜、秋山謙蔵、島木健作、伊藤武雄、丸山薫、水原秋桜子、中村研一、小磯良平、野間仁根、斎藤史。
- 9 岩上順一「内面の戦ひ」『日本評論』1942年2月号、1942.2、228-232頁。
- 10 鈴木敏子「『十二月八日』読解」『日本文学』37巻12月号、1988.12、62頁。
- 11 『現代史資料』41「マス・メディア統制2」<http://fomalhautpsa.sakura.ne.jp/Radio/19411208.pdf> (2017.11.29最終閲覧)
- 12 「出征兵士を送る歌」『軍歌と日本人』別冊宝島1428号、2007.7、77頁。
- 13 杉井和子氏は「『真珠』（坂口安吾）の悲しい笑い」（『笑い創造』第5集、勉誠出版、2008.3、423頁）で「『真珠』が、三月七日の新聞記事に触発されて成立したことは明白であるから、安吾の小説の終わり近くの「三月四日の夜になって」が創作を始めた実際の時間である」と指摘した。
- 14 大本営発表後、「九軍神」が神話化されていく当時の言説並びに、同時代の文学者や詩人、俳人、新聞記者の報道ぶりについて、大原祐治氏は詳しい調査を行い、詳細にまとめたのである。（大原祐治「『歴史』を書くこと—坂口安吾「真珠」の方法—」『日本近代文学』65集、2001.10、206頁）

* 討論要旨

谷川恵一氏は、小説における戦時歌謡の意味を論じるにあたって、対象を特に1941年12月8日を描いた作品に限定した理由を尋ねた。発表者は、当日のラジオはニュースの合間に軍歌を一日中流していたことから、この日を扱った小説にも軍歌が登場する場合が多いのではないかと仮説を立て、

一点ずつ目を通したうえで、軍歌が中心的なテーマになった作品、軍歌が部分的に登場する作品などに分類している、と研究の経過を説明した。また、本発表では取り上げなかったが、児童文学には軍国主義教育との関連から、軍歌が登場する作品が多い、と述べた。

谷川氏はまた、伊藤整「十二月八日の記録」はルポルタージュに分類するべきではないか、と指摘した。発表者は、先行研究によれば、この作品は一部創作であるとされているため、ここでは小説として扱った、と回答した。

谷川氏はさらに、「出征兵士を送る歌」が太宰の小説のなかで果たした役割について質問した。発表者は、調子外れの軍歌がもたらす意味については既に指摘があるものの、見送る側がうたう歌であったことや、歌の調子に合わせて行進できない主人の様子に着目すると、主人が兵士に不適格な人間であることを表していると解釈できる、と回答した。

江崎公子氏は、1941年12月8日当時、ラジオで流れていたのが主に管弦楽曲であったことや、当時うたわれていた軍歌が時代遅れだと批判されていたことから、軍歌が戦意高揚の役割を果たしたとは考え難い、と発言した。江崎氏はまた、発表タイトルにある〈歌〉とはどのような意味か、と質問した。発表者は、今回取り上げた歌のなかには、坂口安吾の「真珠」に登場する鼻歌なども含まれているため、「軍歌」ではなく「歌」と題した、と回答した。